

Ⅲ. ボランティア活動報告

1. 松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト

(1) 平成29年度活動概要

松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト 代表 尻無浜 博幸

6年間継続的な支援を行ってきた東日本大震災災害支援プロジェクトの活動は、平成28年度をもって一つの区切りとし、今後は必要に応じて学校の行事等に参加することとしました。

平成29年度は、心のケア・カウンセリング活動と、花山宿泊研修(5年生)へ参加しました。

心のケア・カウンセリング活動は、相談内容からその後の見守りケア的関わりが必要と考え、徐々に関わりを少なくする上での引き継ぎとして3回実施しました(詳細報告は以下参照)。

また、学校行事であり被災後に最初に入學した5年生が対象の花山宿泊研修に4名の学生が参加しました。多くの児童がこれまでの学習支援に参加しており、顔見知りの多い学年でした。一方、参加した学生のうちの一人は、この支援プロジェクトに関わりを持ちたいという希望から松本大学に入學した学生で、積極的な働きが高い評価を得ました。

この支援プロジェクトの経験を今後、学内の防災士養成に活かしていく動きがあり、内なる学びの充実に展開していけたらと思います。



花山宿泊研修出発の様子

(2) 心のケアーカウンセリング報告

臨床心理士・スクールカウンセラー 古林 康江

はじめに

世界を震撼させた東日本大震災からアニバーサリー反応(anniversary reaction)が起こりやすい7回目の日を迎えた。かつて経験したことがない大震災(大津波・大地震・長期にわたる余震・大勢の犠牲者や行方不明者)が残したあまりにも甚大な被害、未だ癒えることのない深い心の傷、トラウマ、フラッシュバック、健康被害。さらに『一歩でも前へ』の復興や、通常の生活も、家族も、地域社会も一変して加わるストレス、孤独死など次から次へと襲う難問が7年間絶えることがなかったように思う。石巻を訪れる度にその深さに心が痛んだ。

この間、被災地の皆様から震災後のトラウマやストレス、さらに人間本来の生き方・現代社会の反省

点等々沢山教示いただき、その時々できること(皆様に会いその様子にほっとさせていただく、話を精一杯お聞きする、カウンセリング……)を唯々夢中でさせていただくことしかできていなかった。

特に遠方支援の我々(毎日毎日が戦いの被災された方々ではないもの)に何ができたのか。唯々ご迷惑をお掛けしたのではと思いつつの7年間でもあった。

1. 平成29年度引継ぎ(3回の訪問)

最後の年に「引継ぎ」として3回の訪問の機会を与えていただいたことに感謝しつつ、7年目の「引継ぎ」(当地のスクールカウンセラー・養護教諭への引継ぎ)について報告したい。

《引継ぎと相談件数 3回で6日間の学校訪問》

- ①1回目 6月15日(木)・16日(金)
- ②2回目 10月12日(木)・13日(金)
- ③3回目 3月8日(木)・9日(金)

	訪問日	相 談 件 数	引継ぎ等の内容
①	6月15日	母親3 教員1 児童1	養護教諭ケース検討
	6月16日	教員2 児童1	S.Cケース検討
②	10月12日	壁面の絵や作品等々の参観	校長引継ぎ・前校長と近況・養護教諭ケース検討
	10月13日	母親3 教員1 児童1 クラス参観(1・4・6年)	養護教諭アンケート調査について S.C&養護教諭引継ぎ
③	3月8日	養護教諭保健室登校A君相談	国府台アンケート結果養護教諭と検討
	3月9日	児童1 母親2 参観(6年)	S.C打ち合わせ
	合計	17件	9回

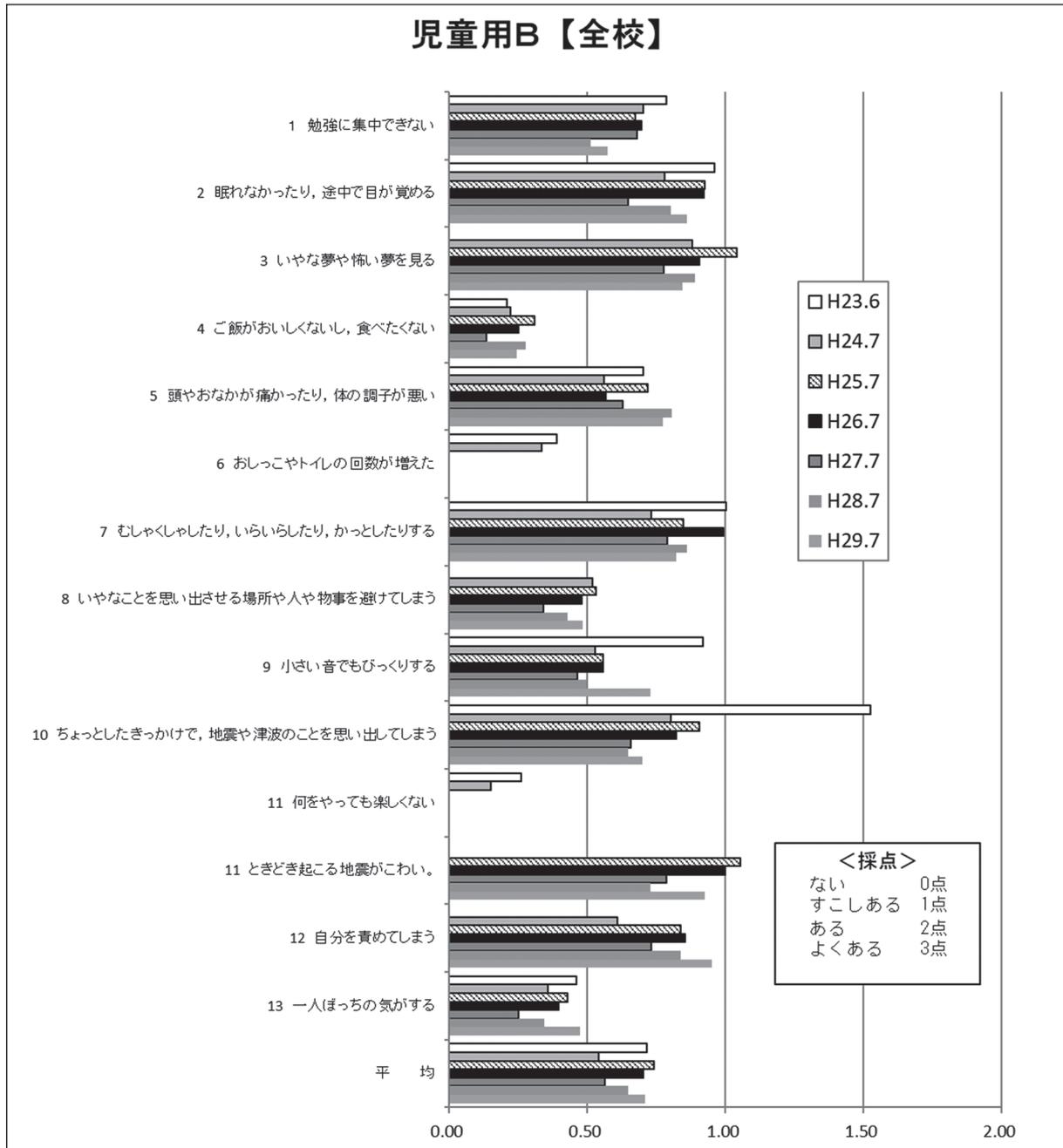
2. 平成29年度のアンケート結果

こころとからだのアンケート 集計結果 【児童用 B】

H29.7実施 大街道小

児童用B 【全校】

	H23.6	H24.7	H25.7	H26.7	H27.7	H28.7	H29.7
1 勉強に集中できない	0.79	0.70	0.67	0.70	0.68	0.51	0.57
2 眠れなかったり,途中で目が覚める	0.96	0.78	0.93	0.92	0.65	0.80	0.86
3 いやな夢や怖い夢を見る	0.88	1.04	0.91	0.78	0.89	0.85	
4 ご飯がおいしくないし,食べたくない	0.21	0.22	0.31	0.25	0.13	0.28	0.25
5 頭やおなか痛かったり,体の調子が悪い	0.70	0.56	0.72	0.57	0.63	0.81	0.77
6 おしっこやトイレの回数が増えた	0.39	0.34					
7 むしゃくしゃしたり,いらいらしたり,かっとしたりする	1.00	0.73	0.85	0.99	0.79	0.86	0.82
8 いやなことを思い出させる場所や人や物事を避けてしまう	0.52	0.53	0.48	0.34	0.43	0.49	
9 小さい音でもびっくりする	0.92	0.53	0.56	0.56	0.46	0.50	0.73
10 ちょっとしたきっかけで,地震や津波のことを思い出してしまう	1.53	0.80	0.91	0.82	0.66	0.65	0.70
11 何をやっても楽しくない	0.26	0.15					
11 とくとき起こる地震がこわい。	1.06	1.00	0.79	0.73	0.93		
12 自分を責めてしまう	0.61	0.84	0.85	0.73	0.84	0.95	
13 一人ぼっちの気がする	0.46	0.36	0.43	0.40	0.25	0.34	0.48
平 均	0.72	0.54	0.74	0.70	0.57	0.65	0.71



3. 相談内容、アンケート結果、地域視察などから見た7年間

アンケート調査結果においては、1年目、3年目、4年目、7年目が高得点であった。

- ① 先ず、自分探し、現在の自己を見つめなおし、受け入れ、築き直しの作業。と同時に様々な支援機関やボランティアの受け入れ。
- ② 家族や親類関係の現状を受け入れ、築き直しの作業。と同時に諸々の継承してきたものの整理。
- ③ 職場の変化や、職場の人間関係の変化へのストレス。

- ④ 隣組の現状を受け入れ、築き直す（変化の差にかなりのストレスと時間がかかった様に思う）、仲間外し、いじめ、妬み……学校生活の中にも不登校児童数全国1位に！相談件数の上昇！災害初期のトラウマにより母から離れられない分離不安とは少し違う復興や父母の忙しさからの孤独感・近隣の軋轢（生活の格差・妬み・仲間外し……）。
- 地域社会⇒他地域へのストレスによる不登校児

の増加と思われる。

- ⑤今年度の相談は不登校・移転&転校(高台への移転)・引継ぎケースの検討

4. 信濃毎日新聞記者同行

最終回となった3月8日・9日の活動には、信濃毎日新聞松本本社の長沼記者が同行し、取材を行っていただいた。

《3月10日記事より》

石巻心のケア、たすき渡す



大街道小の養護教諭やスクールカウンセラーと、引き継ぎをする古林さん(左)＝9日



大街道小からの帰りの際、子どもたちと囲まれた宮阪さん(右)。繰り返し通った向小への訪問を心の財産ですと話した9日

子どもら支え 活動引き継ぎ

2011年の東日本大震災で被災した宮城県石巻市の大街道小学校で、子どもや保護者へのカウンセ

リング活動を行ってきた松本大(松本市)の元スクールカウンセラーで、臨床心理士の古林麻生さん(安曇野)

野市が9日、同小を引き継ぎを終え、活動に区切りを付けた。11年5月からは毎月同小を訪ねて約7

年。「建物の復興は進んでも、心はまだこれからなんだろう」と思いを残しつつ、地元でスクールカウンセラーに後任して、「少しは」とも話した。

【関連記事5面】

古林さんの活動は11年、松さかた家庭の保護者間の摩本大の学生や教職員が同小を。さまざまに相談を聞きつつ、復興に向けて誰かが忙しさを追われる中、後回しにされることもある子どもを守り、多くの住宅が津波に浸るための助言や働きかけをしてきた。

古林さんは今後、7年近い活動の経験を本にまとめるつもりだ。「被災地で教えることもあったことをこれから役に立ててほしい」との思いがあった。この日の引き継ぎの合間に校内を歩き、廊下で集られた子どもたちの絵を見た古林さん。「色もきれいで大きく描いてある。少い安心したよ」

が対象に含まれた16、17年は再び悪化した。古林さんは「母親のストレスや家族、地域の変化が、乳幼児期の成長に影響している可能性もある」と指摘。「これからの対応の仕方が大切」と課題を挙げる。

古林さんは今回、同小の支援にこれまで20回以上通ってきた松本大4年の高橋由子さん(23)と塩尻市に共に現地を訪れた。9日に同小の養護教諭高田公子さん(55)、スクールカウンセラーの安部富子さん(49)に活動の引き継ぎをした。

古林さんは今後、7年近い活動の経験を本にまとめるつもりだ。「被災地で教えることもあったことをこれから役に立ててほしい」との思いがあった。この日の引き継ぎの合間に校内を歩き、廊下で集られた子どもたちの絵を見た古林さん。「色もきれいで大きく描いてある。少い安心したよ」

《4月17日記事より》

被災地支援活動 石巻で取材

松本大(松本市)による東日本大震災被災地支援の一環で、宮城県石巻市の大街道小学校で児童らの心のケアに携わった臨床心理士、古林麻生さん(安曇野市)が3月、7年の活動に区切りを付けた。最後の引き継ぎに合わせ、現地を訪ねた。3月8、9日の引き継ぎの場では、「心のケア、なすき渡す」の見出しで第一社会面に掲載。翌10日は石巻市内を歩いた。地元紙「石巻日新聞」の資料館で、震災直後の避難所に張り出された新聞を見た。編集を指揮した武内宏さん(60)と話している。女の子が声を挙げてくれた。大街道小の卒業生で、2012年3月創刊の「石巻日新聞」でも新聞に記事を書いた木村ひな子さん(18)。松本大の企画で11年夏に松本を訪

記者たより

松本本社報道部

長沼 佳史

「心の復興はこれから」実感

れたといい、「あの時の皆さんは、いくらかまた会いたいです」と話した。立ち寄った食店で隣り合わせた主婦は、幼稚園児の孫を膝で抱きかかっていた。夫は窓の外を見やり、妻は「私たちがまだいい。孫の親は本気で」。沈黙を共にするしかなかった。「建物の復興は進んでも、心はこれからなんだろう」という古林さんの言葉が、町歩き、立ち話をする中で、何度も思い出された。

土産に「石巻日」でも新聞の子どもたちが作った紙芝居を買った。鶴岡の江戸時代、16人を乗せて石巻を出た船が難破。ロシアで保護され、つづいて4人が戻らずも世界一周し故郷へ戻る。史実を基にした「悲しいけれど、ドキドキワクワクもある物語を娘と何度も読んでいます。次は家族で石巻へ行くつもりです」。



教職員の皆さんに最終回のお礼のご挨拶

終わりに、何時も笑顔で出迎えてくださった大街道小学校の教職員や児童・保護者、また、地域の皆様にお礼申し上げます。また、何時も細やかな準備を何時もテキパキと整えていただいた松本大学東日本大震災支援プロジェクトチームの皆様にお礼申し上げ報告いたします。



高田養護教諭・安部S.C・古林で引継ぎと事例検討



同行した観光ホスピタリティ学科4年 宮阪絢子さん
と大街道小学校の子どもたち